

## 万事が益となる恵み

加藤 享

### [聖書]ローマの信徒への手紙8章26～30節

同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの中での長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

### [序] 若き日のパウロの苦悩

木曜日朝の祈り会では、去る18日から、旧約聖書のヨブ記を1章ずつ読み始めました。正義と愛の唯一の神によって創られ、また支配されている世界に、どうして苦しみと悪が存在するのかを探求する書で、文学作品としても世界最大傑作の一つと評価されています。42章から成っていますから、読み終わるのに10ヶ月余かかります。皆さん、この機会にご一緒に読み通してみませんか。信仰の養いになります。

日曜日の教会学校分級と礼拝では、聖書教育の教案に従って4月からローマの信徒への手紙を学んでいます。著者は世界宣教の立役者の一人、パウロです。彼はユダヤ教の将来を担う若者として期待されていました。しかし彼は、神の律法を守ろうと励めば励むほど、どうしても守れない自分の内面の弱さに直面して苦しみました。その一端をローマへの信徒の手紙7章から、伺い知ることが出来ます。「自分の内には、むさぼるなという律法を守ろうとすると、逆にあらゆる種類のむさぼりが、起ってくる」(5節)。「しなければと思う善を行わず、悪を行ってしまう。善を為そうと思う自分に、いつも悪がつきまとっている法則が働いている」(21節)。「だから私の内面には、神の律法を喜ぶ自分と、善を行わせない罪の奴隷になっている自分がある。なんと惨めな人間だろうか」(22～24節)。

パウロは、律法をしっかりと守るユダヤ教徒として立とうとしながら、罪の奴隷となっている自分を処理できずに苦しみました。そしてその悩みを吹き払おうとして、キリスト教徒迫害の急先鋒として暴れまわったのでしょう。しかし迫害している最中に、復活されたキリストとの霊的出会いを体験し、キリストによる救いを得る劇的な回心をしたのでした。

### [1] キリストによる救い

では善をなそうとする自分と、罪の奴隷になっている自分が葛藤して、悪に負けてしまう惨めな自

分から、パウロはどのようにして救われたのでしょうか。

ローマ8章1～2節をご覧ください。「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、あなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。」

分かりやすく言い換えますと、イエス・キリストと結ばれると、命をもたらす霊が与えられ、そのキリストの霊の働きにより、罪と死の法則から解放されるのです。善をなそうとする自分と、罪の奴隷になっている自分が葛藤して、悪に負けていた惨めな私の中に、善を為そうとする自分を力づける命の霊が注がれて、善を行わせない罪と死の法則から解放してくれるのです。

ここに霊と肉という言葉が、対比して使われています。肉に従って歩む者(5節)、肉の思いに従う者(7節)、肉の支配下にある者(8節)等と表現されていますが、自分の思いやこの世のことを優先していく状態を肉と言い、「悪につきまとわれ、引き回されて、善をなそうと思っても出来ない状態の自分」を表現している言葉です。

それに対して霊は、神の思いを優先し、神の導きに従おうとする状態を言い、霊に従って歩む者(4, 5節)、霊の思い(6節)、神の霊の支配下にいる者、キリストの霊を持つ者(9節)とは、「イエス・キリストを自分の救い主と信じて、キリストに結びつくことによって、キリストに豊かに蓄えられている神の霊を注いでいただき、罪と死の支配から解放された自分」を表現している言葉です。ですからいわゆる「精神と肉体」という概念とは異なる聖書独自の用語だということを、しっかり理解しておく必要があります。

十字架は、手足を柱に釘付けにされた状態で、死の苦痛を出来るだけ長く与えて殺していく最も残酷な刑罰です。キリストは朝9時に磔けられて、午後3時に息を引き取られました。キリストはそのような刑罰を受ける罪を何一つ犯しておられませんでした。しかし、彼こそ待ち望んでいた救い主(メシア)ではないかと期待を寄せる民衆の動きに、危機感を抱いたユダヤ教の指導者たちが、権力を行使して、十字架刑を執行したのでした。

しかしキリストは、自分を守ろうとは一切なさいませんでした。「父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、御心に適うことが行われますように」(マルコ14:36)。この祈りは、「神のお考えが最善です。その通りになさってください。私は従います」という祈りです。そして鞭打たれ、つばきを吐きかけられ、罵られながら、「父よ、彼らをお赦してください」(ルカ23:34)と祈りつつ、十字架の死を遂げられたのでした。

神はどうして、キリストを十字架に架けることを、よしとされたのでしょうか。それはキリストを十字架に架けることによって、私たち全ての人間の罪を処罰なさったからです。この世の法律でも、無実の人が裁判で有罪とされて処刑されますと、後で真犯人が現れても、彼はもはや処罰されません。彼

の罪に対する処刑は終了しているからです。

こうして「わたしはあなたの犯す罪の一切を十字架で処罰した。あなたはもう赦されている」という神の赦しの宣告を聞き取り、悔い改めて、神の許に帰ってくるようにと、私たちは呼びかけられているのです。善をなそうとする自分と、罪の奴隷になっている自分が葛藤して、悪に負けてしまう惨めな私の中には、死と滅びこそあれ、互いに愛し合い、助け合って人生を全うする喜びの展望はありません。しかし神の救いの招きに応えれば、変わってくるのです。

イエス・キリストの十字架の死には、全ての人を祝福しようとされる愛の神のなされることは最善だとする、キリストの絶対の信頼と従順さが込められています。そこでイエス・キリストを自分の救い主と信じる時、肉の支配下にある私たちの内にも、神の霊が宿り、赦しの恵みと共に、神の御心を第一にして従って行こうとする霊の歩みが、生まれてくるのです。

イエス・キリストは十字架で息を引き取り、死者として墓に葬られました。しかし神は、彼を復活させて、死を生に変える神であることを現わされました。パウロは言っています。「もしイエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かして下さるでしょう」(ローマ8:11)。死を生に変える神の霊の働きが、私たちの内面の死を生に変えて下さるのです。

私たちは主イエス・キリストを、自分の救い主として信じて生きていこうと決心しますと、その信仰を皆の前で告白し、バプテスマを受けて信仰者の歩みを始めます。聖書に記されているバプテスマ式は、全身を水の中に沈めて、古い自分の死を表わし、水の中から起き上がることで、神の子とされた自分の誕生を表わす儀式です。

先週学んだ6章4節で「私たちはバプテスマによってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それはキリストが御父の栄光によって死者の中から復活されたように、私たちも新しい命に生きるためなのです」と述べられているように、私たちは、信仰によってキリストと結ばれて、新しい命を生き始めていくのです。

未だバプテスマを受けておられない方は、一日も早く決心をして、バプテスマを受け、新しい人生を歩み始めるよう、お勧めします。

## [2] 万事が益となる

次に、8章28節に注目いたしましょう。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」これは新約聖書の中で、最もよく知られている聖句の一つです。文語訳の「すべてのこと相働きて益となる」で覚えている方も多いでしょう。

32節にもこう語られています。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」。本当にそうです。イエス・キリストを私の救いのために賜った神です。万事に於いて私たちに益をもたらしてくださいに違いありません。

人生には、自分の愚かさや罪深さや、他人の悪意から、不幸・不運と思われることが我が身に降りかかってくるものが多いものです。しかし愛の神はそれらをも、私にとっての益に変えて下さる。「共に働く」とは、神と一緒に働いてくださるという意味も込められているのではないのでしょうか。

私は小学校6年の時に、肋膜炎にかかり、戦争中で疎開騒ぎになったので、東京を離れ、北海道でゆっくり休学して療養し、6年を村の小学校でやり直している8月に敗戦になりました。二学期が始まると、各自の教科書の誤りの箇所を、先生の指示で習字の筆と墨で塗りつぶす作業をさせられました。ある頁は真っ黒。自分たちはこんなに間違っていることを教えられていたのかと、愕然としました。そして時代が変わろうと塗りつぶされない本当の真理を学ばなければならないと、子どもながら、心の底から強く思いました。それが後に、聖書を手にし、教会に行く動機になったのです。

東京に戻って、中学生生活を始めました。しかし授業は午前だけ。そこで午後は、皆で野球をして過ごしました。医者からは過激な運動は控えよと言われていましたが、他にやることがないので、自分勝手に野球にのめりこみ、野球部の選手にまでなってしまいました。そして高2の時、肺結核による大咯血、入院手術、長期療養の身になりました。

幸いにも中学時代に同級生に誘われて日曜日には目白ヶ丘教会に通い始めていましたので、自分の罪深さを自覚させられて、バプテスマを受けました。そして牧師になり、与えられた命を神の御用に捧げようと決心し、東京神学大学に入学、30才で目白の副牧師にいただきました。

しかし恵まれた教会生活に、これではいけない、もっと貧しくならなければと開拓伝道を志願しましたが、示されたのは札幌教会。随分ためらいましたが、御心に服従して赴任しました。そして赤ん坊から成人までの全年齢層の教会学校を皆で建て上げました。

教会附属幼稚園を卒業した教会学校生徒と親たちを礼拝に結びつける一環として、ホールで剣道場を開設。小1から中3までの9年間、週2日剣道範士の指導の下に稽古を続け、たくましい男児の信者育成に取り組みました。当時35才の私も一緒に稽古を始め、62才で剣道教士7段になり、昨年未まで剣道稽古を続けてきました。私の健康維持の原動力です。何故剣道を？ 小学校時代の担任教師が剣道3段で、その指導を受けたからです。

85才の今日、いまだに現役牧師として働かせて頂けているのも、敗戦の挫折、愚かな大病による学業の挫折、様々な人との出会いと導きの全てが、相働きて益となったのです。神がそれを、私にとっての恵みとして下さったのです。本当に有難いことです。感謝です。

昨年12月23日から妻の喜美子が腰椎圧迫骨折で入院、2月3日、退院直前に病室内で転倒して大腿骨骨折、手術を受け、3月28日に退院しました。93日の入院生活で、足の筋力がすっかり衰えてしまいました。家事の復帰、集会出席には、未だ時間がかかるでしょう。家事、介護をしながらの牧師生活、十分なことが出来ず、申し訳ありません。

しかし、私は今の生活を余り苦にせず、何とか暮して居ります。喜美子の前途にも不安を感じていません。彼女にとって一番良い老後の生活が備えられているでしょう。これまでと同様に、「万事が益となるように共に働く」という御言葉を信じて、感謝しつつ、平安に毎日を送らせて頂いております。

### [結] 恵みを惜しまずに与える神

「万事が益となるように共に働く」。このみ言葉の恵みを、しみじみと覚えます。人生で経験するどの一コマ一コマの背後にも、神の愛の御配慮があるからですね。「御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」。パウロの言葉は、本当にそうですね。

私たちの神は、イエス・キリストを私たちの救いのために賜った神です。万事に於いて私たちに益をもたらしてくださるに違いありません。この信仰を大切に抱きつつ、神が各自にお与え下さる生涯を、全うして参りましょう。

祈ります：主なる神さま、あなたの御名を心からほめたたえます。今日も愛する皆さんと共に、このように礼拝を守れた恵みを感謝します。主イエスの十字架と復活によって、信じる私たちに、あなたの霊の命を豊かにお与えくださり、罪に引き回されて身を滅ぼす道から、救い出してくださいましたことを、心より感謝いたします。罪を犯してしまう者です。どうかその罪を、自分だけでなく、周りの方々の益に変えてくださり、あなたのご栄光をあらわして下さいように、お願いいたします。主よ、武器を手に、かけがえのない命を損なう罪から私たちを救ってください。戦争を止めさせてください。苦しみや悲しみを恵みに変えてください。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン